
～ 紅 ～

花崎緋媛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（紅）

【Nコード】

N3282D

【作者名】

花崎緋媛

【あらすじ】

普通の高校二年生の紅美樺くれないみかは二重人格だった。そのもう一人のミカの事をアイツ《・・・》と言おう。アイツはミカを不幸におとし入れようとする魔女だった。ついにミカは血も涙もないアイツに体をのつとられて・・・しかし・・・その血も涙もない悪魔と思っていたアイツは心に深い傷を負っていた。ミカは自分自身のためにも、アイツのためにも自分を救う事ができるのか？！

File・1：殺人少女（前書き）

『血』を表している文章があります。

そこまでリアルではありませんが（未熟なため・・・）

そして部分、部分そういう表現がありますが、物語的にはホラーではありません！はい。

苦手じゃない（読もう！）と言う方だけごゆっくりお読みください
！！

File・1：殺人少女

白い腕から滴り落ちる深紅のルビーのような赤黒い液体……。その液体は白い腕のひじまで到達するとその少女の目の前に横たわっている屍に一滴ずつ屍の洋服に染み込んでいく……。

「っはあ、はあ、はあ……。……がう……。ちがう。あたしがやったんじゃない!!」

『貴様だ。そこで永遠の眠りにについている人間は……。貴様が……。紅 美樺くれないみかが殺したのだ。……。そう。その手に持っているナイフで……。貴様が……。』

気味の悪い声としやべり方だった。耳元で囁かれている様で吐き気がした。

「違う……。あたしじゃない! 殺したりなんかしてないっ!」

『……。死体を学校の裏山の奥深くに行って埋める。……。さもなくば……。捕まるぞ?』

「っ! やめて! 誰なの。さっきから……。私に話しかけないでっ!」

『……。』返事はなかった。ミカは恐る恐る手にしているナイフと自分の目の前に広がる血の海を視界に入れた。

……。あたし……。どうすればいいの……。そういえばさっき……。アイツが……。

『死体を学校の裏山の奥深くに行つて埋めろ』って……。

ミカは殺害現場となつた王陵高校の屋上から死体を背負つて姿を消した。だが、死体が消えても真つ赤な血の海は満月に近い形の月に照らされ変に光っていた。

（翌日）

「ミカあ？ご飯よ。おきなさい。」ミカの母親がミカを起こしにきた。呼んでも呼んでも起きてこないの直接起こしにきたのだろう……。

「ううん……。今日……。学校休む……。」

「……。いい加減にしなさいっ！！ほらっ。涼眞君が迎えに来てるわよ。」

「り、リヨーマがつ！？」あたし、バツとベッドから降りて急いで制服に着替えた。

「もお。お母さん……。なんでもつと早く……。おこし……。て……。いえ……。何でもありません……。」お母さんの機嫌悪そうな顔を横目で見てあたしは悟った。

『口答えすると……。血祭りにあげられる……。』と。

血……。そういえば……。あの光景は……。夢だったのだろうか……。夢……。そうであつてほしい……。あたし、そう思いながら階段を下りていった。もし……。もし夢ではなく、あれが現実であれば……。私は一生ではなくとも長い間冷たい鉄格子とコンクリートに囲まれた牢屋の中で……。すごすことにいいいい……。

「どうしたの？顔色が・・・まあ、あんたは年中白いしね。はははつ。」・・・我が母ながら・・・年中陽気で・・・うらやましい・・・。

「あ、リヨウマ。ちょっとだけ待って！すぐご飯済ませてくる！」
あたし、玄関に座っていたリヨウマに顔の前で手を合わせてゴメンっ！のポーズをするとすぐさまキッチンへ行き冷蔵庫からバターロールをだしてほおばった。それを見てお母さんが

「まあ・・・はしたない。あんた・・・女の子でしょ？もう少しお上品にしたらどうなの・・・。はあ・・・雄輝はあんなにおとなしいのに・・・姉として恥ずかしくないの・・・。」

「もお・・・うるさいなあ・・・。あたしはあたし。ユウキはユウキ。姉も弟もない！行ってきますー！」

ミカは走って玄関に行ってしまった。

「はあ・・・。どこで育て方を間違ってしまったのかしら・・・。はあ・・・。」

「・・・母さん。俺も行ってくるよ。」

「ああ。ユウキ。行ってらっしゃい。」

「リヨウマ、ごめん！待たせたね・・・。」再びゴメンのポーズ。

「いいよ。ミカの寝坊は今に始まったことじゃないし。」ううつ・・・。
あたしが悪いんだけど・・・ちよつとム力つく・・・。

「あ、ユウキ。おつはよう。」リヨウマが私の弟、ユウキに挨拶する。

「・・・おはようございます。朝から大変ですね。リヨウマさん。
・・・猛獣のお散歩・・・」

・・・猛獣・・・ってあたしのこと？！

「だねえ。でも毎回のことだからなれちゃったよ。」ううっ・・・。

ほしみね 星峰 りょうま 涼真は私の幼馴染。この家の、隣の隣に住んでるの。もう・
・超アイドル顔でえ、かつこよくてえ・・・ってそんなんじゃない
からねっ！！！！

私の弟の紅くれない 雄輝ゆうきは、顔はすっごくよくて、パーツそろってて、ス
タイルもよくて、COOLで、頭よくて・・・あたし以外のメスだ
ったらお好みの男子だろうけど・・・性格・・・悪すぎ・・・。

「ミゝ力あ。いつまで突っ立ってんの・・・。俺一人で行くよ？」

「あ、ちよつとまってよ。」ミ力はそう叫ぶと急いでリヨウマの自
転車の後ろに座った。

「・・・ったく・・・。色気もへったくれもねえなあ。女子なら横
向いて座れよ・・・。スカートのくせに堂々と座りやがって・・・。
「リヨウマが後ろを向いて呟く。

「へっ？何のこと？」

「・・・リヨウマさん。猛獣に何言っても無駄ですよ。馬の耳に念
仏？・・・違うな・・・。虎の耳に念仏？て感じ・・・。まあ、馬

のほうが大人しく聞いているだけ利口だな・・・ふっ・・・」つと前を自転車で走っているユウキが言う。

・・・私ってそんなに色気ないのっ!! ショック・・・。

「だなあ。せつかく美人なのにもつたいねえな。」え・・・。美人？うれしい／＼／

「ねえ、リヨウマあ。」ん？何だ？と聞き返してくれるリヨウマをあたしは愛しく思った。

次々とこみ上げてくる感情を抑えきれなくて、一生懸命自転車をこいでいるリヨウマの腰に手を回してギュッと抱きしめた。こういうのが【幸せ】って言うのだろう。

・・・美香はそう思った。【不幸】を知らないというのが【幸せ】だ。

この後の【不幸】が訪れることはアイツしか知らないのだから・・・。

↓学校到着↓

「？みんななんかざわわしてるな・・・。なんだろう・・・。」

「・・・。」・・・もしかしたら・・・もしかしたら・・・。

「・・・事件があつたみたいです・・・ね・・・。」ユウキが冷静に口を開く。

「な、何であんたにそんなことがわかるのよ。」私、ちょっとあせる。怖くて怖くてリヨウマの腕を握る力が強くなる。

「だって・・・屋上に人だかりが・・・たぶん警察だと思うけど・・・しかも駐車場に刑事の車あったし。」・・・どうしよう・・・昨日のことが事実だとしたら・・・。

「さすがユウキだなあ。よし。屋上に行ってみようぜ！」リョウマがはしゃぐ。

「そうですね。俺も行きます。」・・・本当ならば・・・この事件（？）に無関係です！って言い切れるなら・・・リョウマが行くんだから私が行くのも当然・・・でも・・・無関係かどうか・・・わかんないよ・・・もし関係あるなら・・・張本人だよ！！あたしは！

「ミカは行かないのか？」リョウマはミカの顔を覗き込んだ。

「あ、あたしは・・・いいや。」

「なんだあ？怖いのかあ？あ、怖いんだろっ！！ヨウムシ。」・・・ゴメン・・・リョウマ・・・冗談で言ってるってわかってるよ。でも・・・本当に怖い・・・そうだよ。ヨウムシだよ。真実を知るのが怖いだけ・・・。

「・・・足・・・震えてんぞ。・・・怖いなら怖いって言えよ。横に素敵なヒーローが二匹もいるだろ？」

「・・・うん。そうだね。たのもしいや」私はその優しい言葉のせいで目から次々と涙がこぼれて校門のところに植えてある芝生を潤した。そうだ・・・あたしにはこんな頼もしいヒーローが二匹（違）もいるじゃないか。怖くない。

『・・・怖くない・・・とは随分と勇敢になったなあ。ミカ。早くそいつらと屋上へ向かうのだ。』

「や・・・やめて・・・誰なの？あたしに話しかけるのは・・・。」

『私か？私に名などない。・・・しいて言えば・・・貴様の中にいるもう一人のミカだ。・・・さあ・・・自己紹介は終わりだ。早く屋上へ行くのだ。』

「や・・・やめて・・・あたしの中にもう一人のあたしなんかいない・・・。あたしはあたしよ！」

「・・・？どうしたんだミカ。さっきから独り言がヒドイぞ？」

「ち、ちがうよ。独り言なんかじゃない・・・あたしに話しかけてくる奴がいるの！」

「えっと・・・そんな奴はいないけどなあ・・・」リヨウマが周りをキョロキョロと見る。

「・・・私の心から・・・私のもう一つの人格が・・・私に喋り掛けてくるの・・・！」

リヨウマは疑った目であたしを見てくる。・・・そんな目で見ないで・・・リヨウマからそんな目で見られたらあたし・・・。どうしたら・・・。

そのとき、リヨウマとミカのやり取りを黙って見ていたユウキがミカを抱き寄せてミカの目を手でふさいだ。

「なんだよ急に・・・姉弟で・・・」

「・・・なんだよ、はあんただ。リヨウマさん。あんた、少しは・・・
・ 氣付いてんだろう？こいつが・・・ミカがあんたのことスキだっ
てこと・・・なのにそんな目で見て・・・ちよつとは考えるよ。好
きな奴にそんな目で見られるのがどんなにつらいか・・・。」

ちよ、ちよつと！何言ってるのコイツ！てかい加減はな・・・せ・
・

「・・・」そんな勝手な言い分に反論一つ帰ってこず、足音はどん
どんあたしから遠ざかっていった。これは・・・あたしとリヨウマ
の心の距離だ。ここで何も言わずに去っていった。それがリヨウマ
の本当の気持ち・・・。本当の答え・・・。

ミカはユウキの手でふさがれた目から宝石のような涙を流した。

「・・・」そして少しの間その姉弟は紅葉した葉が落ち、風と一緒に
なつて舞うのを一緒にみていた。

↓放課後↓

うつつ！！氣まずい・・・リヨウマと一緒にのクラスだあ！って喜ん
だ一学期が懐かしい・・・。

しかもよりによって隣の席かよ。・・・どうしよう・・・このまま
つてのも嫌だな・・・。

「あ、あのさあ、さ、さつきはごめんな？」えっ？リヨウマが謝っ
てる？マジで？

ミカは夢ではないのか？と言わんばかりにリヨウマの頬をつねる。

「いへっ。いひゃい。いひゃいつ。いひゃいつてばっ!!」・・・
夢じゃない!!

「いやあ。こつちもごめんね。ユウキがへんなこと言っちゃって。
あとで叱つとかなきゃ」

「え?なんでユウキを叱るの?別にウソではないだろ?叱ることな
いよ」あ、そっか。別に変なことではないよね・・・って

「ち、ちちち・・・違うよ!!だ、断じてリヨウマの事は・・・」

「スキ、なんだろ?そんぐらい小さいころから知ってるよ」もお/
ノノ恥ずかしいノノ

「あ。そうだ。仲直りもかねてユウキと三人で屋上見に行こうぜ。
さっきお姉さまを傷つけちゃったからなあ。ユウキ、怒ってるだろ
うな。」

「別に怒ってはいないと思うよ?」・・・アイツかわいそうだな・・・
・トリヨウマが呟く。

「なんで?」するとリヨウマはあたしの耳にささやく

「男の秘密は告げ口禁止だ。」と。クスツと笑いながら教室を出て
行ってしまった。

「ねえ。リヨウマ?」ん?何?という返事。やっぱりこのヒトだけ
は離したくない。離れたくない。だって・・・スキなんだもんノノノ

F i l e ・ 1 : 殺人少女（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございました。
連載ですので、これからもよろしく願いします！

File 2:支配者

ユウキの教室の前にて・・・

「な？朝の事はごめんっ。許せ！！じゃなくて・・・許してください！」

「・・・」

「・・・許さなきゃお前の秘密をミカにばら・・・ぐふあっ・・・
！」ユウキはリヨウマのみぞおちに右フックを・・・あたしは・・・
どうすれば・・・

「やめときなよ。リヨウマさん。・・・俺と喧嘩すると・・・その
綺麗な顔がグチャグチャになってモアイ像みたいになるよ？」・・・
・とにこやかに怖い事をサラッと口に出す。

表情と言ってる事が矛盾してる・・・。怖い・・・。

「ま、いいか・・・。今のフックでチャラにしてあげるよ・・・今
度俺を脅すと墓場に埋めるから。ね？センパイ。」

「あっはっははははは・・・」「うううっ・・・空気がイタイ・・・
。

「じゃ、じゃあ、屋上見に行こうぜ。」「とリヨウマ。するとユウキ
もそうですね。と屋上へ向かう。

・・・怖い・・・。どうしよう・・・行きたくない・・・。

『クスッ・・・ほら。言っただろう。「怖くない」という言葉は弱虫が強がるときに使う言葉だ。まあ、いい。お前もまだ17つの小娘だ。私もそうだが・・・貴様より知能は上だ。それはさて置き・・・早く屋上へ行け!』

「ねえ、昨日の夢は現実だったの?」

『・・・夢・・・?お前は夢など見ぬはずだ。教えておいてやろう・・・。私はお前のもう一つの人格でもあるが・・・それ以前に夢魔族だ。人間どもの悪夢を喰らい、生きている。だから貴様は夢など見るはずないのだ。・・・貴様のみる夢は・・・悪夢だらけだ。クッ・・・貴様の夢は格別の味だ・・・』

・・・夢魔族・・・悪魔?よくわからない・・・。

「おい、どうした?ミカ。」随分と遅れをとったので心配してリョウマが見に来たようだ。

「・・・あ、ごめん。ちょっと考え事してた。」

「そっか。それよりな、現場見てきたんだけどよ、血の池地獄だったなあ。ブクブクとはなつてないけど・・・ま、要するに血の海?」

「!」あたし、走り出してた。屋上に向かって。

「ギイツ」屋上の扉を開けるとたくさんの警察が指紋取りや理事長、校長、教頭先生から聞き込みなどをしていた。

「・・・あっ!!!!!!!!」あるものをみて私はビククリした。

「ミカ、どうしたんだよ。いきなり走り出して……。しかも「あつ！！！」って何？」

リヨウマが息を切らして一気にしゃべる。でも……。今のミカの耳にはそんな言葉など入っていなかった。

「あ……。あ……。ああ……。きゃあああああ！！！！！！！」

……。それからしばらくたつたと思う。……。多分あたしは気絶したんだと思う。……。ショックで……。ベッドに寝てる……。保健室か……。

「リヨウマ、ユウキ。ごめんね。心配かけて。」ベッドの周りにはリヨウマ・ユウキ、そして保健室の先生がいた。

「……。いいよ。それより……。どうしたんだ？いきなり叫んでいきなり気絶って……。」

「……。なんでもないよ。あまりにも血の海がグロくて……。怖くなったの。」

「……。なんだ。そんなことかあ……。ビクリしたよ……。」

「ふつ……。人騒がせな猛獣だな……。射殺せねば……。」ユウキ怖つ……。

でも……。本当はグロかったから怖くて……。とかそういう理由じゃない……。

だって……。あの現場には……。ある物だけ残って……。ある物が

なかった・・・。

そしてそれをあたしは覚えてる。あの現場にあったもの・・・血の海・・・。現場からなくなった物・・・死体・・・。

「帰ろうか。ミカ。よし、今日はミカン家でスキヤキパーティーだつ！！材料はまかせろ！！」

「・・・ちよつと、なんでリヨウマが勝手に決めんのよ。」もう！ホント勝手なんだから・・・。

「くすつ・・・ごゆつくり。俺はお先に帰らせてもらうよ。・・・バカップルがいるとうつとうしいからね。じゃ、先生、うちの猛獣がお世話になりました。」

・
そういいながらユウキは帰ってつた。つて・・・バカップルつて・・・

「んじゃ、私も職員会議でなきゃ。なんでも屋上で多量の血痕が見つかつて・・・なんでも被害者が消えたらしいからねえ・・・。さ、私もバカップルがいると殺したくなっちゃうからさつさと会議に行っちゃおうつと。・・・会議が終わるまでには帰るんだよ^^でないと・・・埋めちゃうから。」

「えっ・・・そういえば・・・血の海しかなかった・・・あんだけ血い流すほどの怪我したら親が気付くだろうし・・・どこ行つたのかな・・・。」

どうしよう・・・私に殺意がなかったとしても・・・私が殺したんだ・・・この手で・・・
そうだ・・・。あれは夢じゃない・・・。昨日の夜の事だ・・・。

夢なんかじゃない・・・。

「なあ。ミカあ。先生も会議に行っちゃったぞ？早く俺たちも帰ろうぜ？」

「リヨウマあ・・・怖いよあ。」私、リヨウマの制服の裾をつかむ。

「大丈夫だよ。きっと犯人もすぐ捕まるって。安心しろ。俺がついてる。バカップル同士でいたらさ、捕まらないって。」

・・・こんなにつれしい事言ってもらってるのに・・・好きなヒトにこんなこと言ってもらってるのに・・・うれしいけど・・・うれしくないよ・・・だめだよ・・・。犯人はあたしなんだよ・・・。もし・・・もしリヨウマにあたしが犯人ってばれたら・・・やつぱり通報されちゃうのかな・・・？やつぱり避けられる？・・・絶交・・・？

やだよ・・・そんなの・・・絶対やだよ・・・！！

「どうしたの？ミカ。早く帰ろう。」

「あ、そ、そうだね。うん。」

（帰り道）

「ねえ・・・リヨウマ？あたしが・・・もしあたしが・・・ひところしたらどうする？」

ストレートな質問だった。もう少し具体的に聞けばよかったんだと思っただけど・・・あまり詳しくすぎると・・・勘がいいリヨウマには気付かれてしまうかもしれない・・・。

「ミカが？人殺し？ははっ。無理だな。第一凶器ももてねえだろ。臆病だからなあ。」

ちがう・・・あたしが聞きたい事はそんな事じゃ・・・

「もし殺したとしても・・・俺は共犯者になるぜ！なんせ・・・バカッブルだろ。俺たち・・・でも・・・ミカはそんな事する奴じゃないし。共犯者にはなれねえな。はははっ」

・・・リヨウマ・・・。ありがとう・・・。でも・・・そんな事する奴なんだよ・・・あたしは・・・。

『ククッ・・・。「そんな事する奴じゃない」か・・・。このガキもいうものだ・・・。バカはバカらしく貴様の死まで幸せに暮らしておればよいものを・・・このガキ・・・貴様の共犯者になるつもりか・・・ククッ・・・。』

「やめてッ！！あたしから出てっつてよ！！リヨウマのこと・・・悪く言わないでっ！」

「・・・？どうしたんだ？！ミカ・・・？ミカ？」リヨウマの目の前のミカはすこし様子が変だった。

「ククククッ・・・。なんでもないよ。リヨウマ。ほら、あたしの家でスキヤキパーティーするんでしょ？早くいこっ？」

「・・・そうだな。行こうか。あ、俺、家に帰って材料とってくるわ。」

じゃあなつとリヨウマは家に帰っていった。

「ククククツ……。やっとしてにいたぞ。ミカの体……。今日から私がミカだ。貴様は一生私の中で生きるがよい。私の命尽きる時……。貴様の命も尽き果てる……。そうだ……。朝と昼は私がこの体を支配しよう……。夜は……。貴様の好きにするがよい・・。」

クスクスクスツ……。今日から……。紅くれない美樺みかは私だ・・。

「クスクスクスクスツ……。・・・・・。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3282d/>

～ 紅 ～

2011年1月21日02時31分発行